ぐるぐるヤ↓ミ↓プロジェクト

はじめに

本書は、東京都、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）、一般社団法人 谷中のおかっての共催により、東京アートポイント計画の一環として2010年度から2013年度に実施した台東区谷中界隈を舞台としたアートプロジェクト「ぐるぐるヤ→ミ→プロジェクト」についてまとめたものです。

＊

本プロジェクトを実施するにあたり、地域内外のたくさんの方々にご協力いただきました。2009年の「学生とアーティストによるアート交流プログラム」への参加以降、本書作成までの5年間、活動を継続できたことに感謝し、これからも続けていきたいと思えることを本当に嬉しく思っています。

また、本書を作成するにあたりご尽力いただいた関係者のみなさまにこの場を借りて厚くお礼申し上げます。

一般社団法人 谷中のおかって
代表　渡邉梨恵子

目的を決めずに集まったり解散したりし続けたら、どんなことが起きるだろう？「ぐるぐるヤ→ミ→プロジェクト」は、そんな好奇心から出発しました。

このプロジェクト名をひらめいたと同時に、私の中にぐるぐると妄想を掻き立てる思考の渦がうまれ、その影響を受けた身近な人々がさらにぐるぐるし始め……、“集い”を繰り返すうちに、たくさんの人のさまざまな期待や希望が渦の中に投げ込まれ、小さな渦の集積が瞬く間に大きな渦の波に成長していきました。

このプロジェクトには、私だけではなく、たくさんの人々の意志や想いがうごめいています。ですから、この本を読んでも、スッキリ何かが“わかる”ということはないかもしれません。

しかし、私たちが私たちの未来をできる限りをつくしてつくり出そうとしたその痕跡を、氷山の一角ではありますが、この中に詰め込んでいます。「ぐるぐるヤ→ミ→プロジェクト」にまつわる用語解説や、企画のレシピ、この出来事に関係が深かった方々のインタビューを通して、「ぐるヤミ」の中に息づいていた、ゆるさと熱さを併せ持つ独特な空気感や、たくさんの意志の集積が織りなすハーモニーを、妄想していただけたら幸いです。

一般社団法人 谷中のおかって
プロジェクトディレクター　富塚絵美（ちょり）

目次

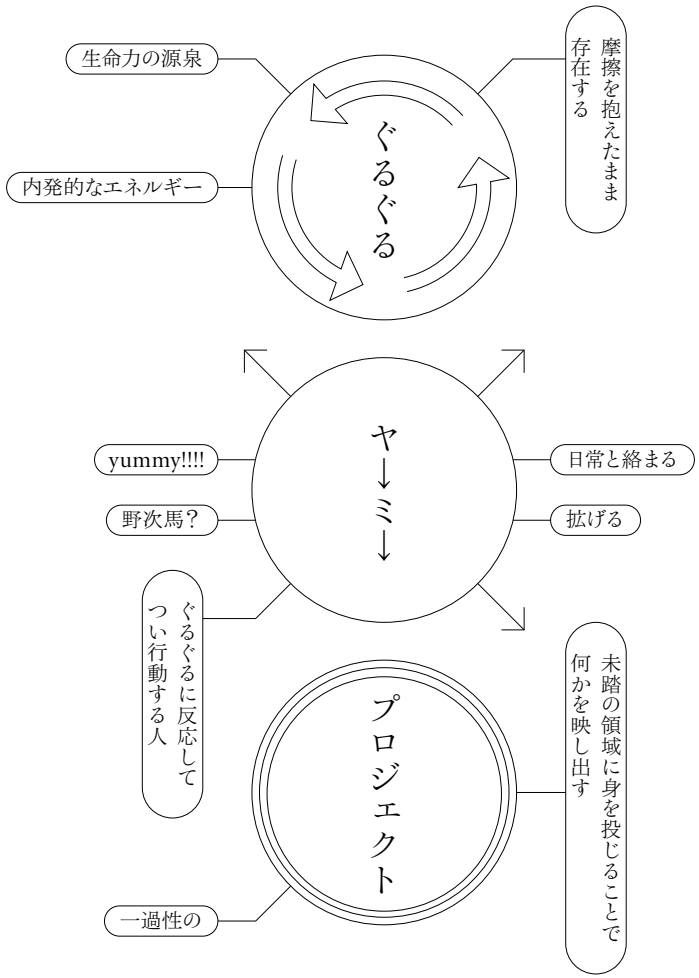
はじめに …… 002

Ⅰ「ぐるヤミ」とは？
1.「文化創造拠点」をつくる …… 006
2.「ぐるヤミ」のルール …… 007
3.「ぐるヤミ」の運動 …… 008
4.「ぐるヤミ」がつくり出すもの …… 009
5.「ぐるヤミ」の3つの柱 …… 010
①ぐるぐる／②妄想／③ヤ→ミ→

Ⅱ　企画とレシピ
「ぐるヤミ」の胎動 …… 018
「ぐるヤミ」に現れた6つのカタチ …… 019
1 はっち …… 022
2 谷中妄想ツァー!! …… 026
3 きむらとしろうじんじんの〈野点〉 …… 030
4 ぐるぐるミックス …… 034
5 谷中妄想カフェ …… 038
6 どーぞじんのいえ …… 042
「ぐるヤミ」から派生した出来事 …… 048
▷ …… ［ぐるヤミMAP／ぐるヤミ年表］

Ⅲ　記録
フォトアルバム …… 050
「ぐるヤミ」の周辺 …… 073
熊倉純子先生に聞く／谷中妄想ツァー!! 座談会／きむらとしろうじんじんインタビュー／月曜私塾／まちのこえ
「ぐるヤミ」の中心 …… 089
「ぐるヤミ」の歩みとこれから：富塚絵美／大西健太郎／渡邉梨恵子
▷ …… ［ぐるぐる節］
活動記録 …… 097
ぐるヤミ辞典 …… 103

［別冊］ぐるヤミ観察日記


摩擦を抱えたまま存在する
ぐるぐる
未踏の領域に身を投じることで何かを映し出す
プロジェクト
日常と絡まる
ヤ→ミ→
拡げる
ぐるぐるに反応してつい行動する人
yummy!!!!
野次馬？
一過性の
生命力の源泉
内発的なエネルギー

I

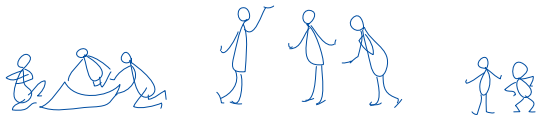
「ぐるヤミ」とは？

1.「文化創造拠点」をつくる

「文化を創造する拠点」とは何だろうか？
「文化」が生まれるきっかけとなる場ではないだろうか。

「文化」とはなんのことだろうか？
生きる知恵や技術ではないだろうか。

「文化」が存在するための必要条件は何だろうか？
「人々」ではないだろうか。



最低何人必要だろうか？
生きやすいとは思えないような場でどうにか強引に生きようとする1人目、
その対象となる2人目、
それらを認識する3人目、
そこに期待する4人目、
それらを発見する5人目。
……最低5人だ。

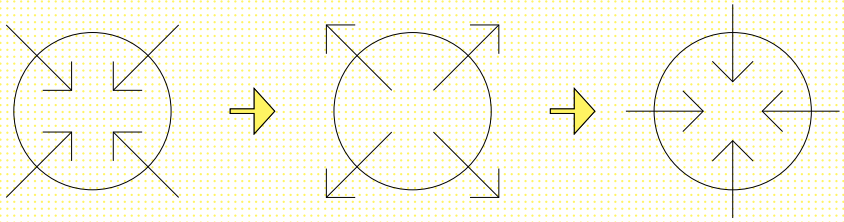
しかし、誰がどんな役割になるかはわからない。
必要なのは「色々な人が集う状況」だ。

そこに創造性を期待するなら、さまざまなゴタゴタを乗り越えられる力、あるいはその力を生み出し引き寄せもする「ぐるぐる（生命力の源泉）」も必要条件に追加される。

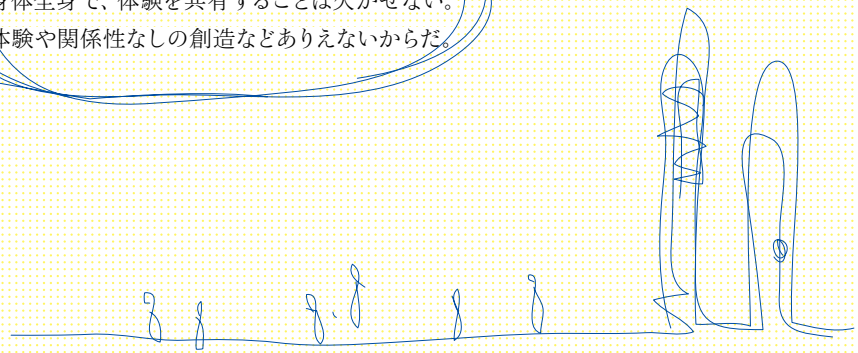
ぐるぐるヤ→ミ→プロジェクト（以下、ぐるヤミ）はその実験であった。

2.「ぐるヤミ」のルール

一、集うこと
一、集ったら解散すること
一、暫くしたらまた集うこと



集いの場は、理屈を超えた魅力を秘めている。
身体全身で、体験を共有することは欠かせない。
体験や関係性なしの創造などありえないからだ。



3.「ぐるヤミ」の運動

今必要なのは
「わたしたち」のためにつくる「アート」
「ひとりひとり」が存在するための「アート」
その「アート」が機能し続ければ
「わたしたち」も「人々」も「ひとりひとり」も存在し続ける

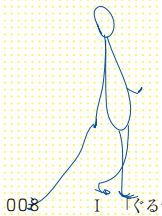
それは新しい「わたしたち」を創り出す
それは新たな「リアリティ」を創り出す

“集いの場”によって
「わたしたち」の範囲が拡張し続けるから
「アート」も更新されていく

※「わたしたち」＝「出会った人」＋「これから出会うかもしれない人」
※ この「わたしたち」及び「アート」は期間限定、出入り自由。
※ この「アート」は刻々と変化し続けるから、輪郭線では捉えられないが、だいたい同じ場所を旋回している。
小鳥に近づくときのように、そっと、さりげなく、そばに寄ること。

「ぐるぐる」の波紋を帯びた人々の身体が、まちの人々にとってパブリックアートになる。

人々の日常に「ぐるぐるヤ→ミ→」という未知なる風が緩やかに吹く風景を目指して。



4.「ぐるヤミ」がつくり出すもの

1 文化関係資本としての「アート」

文化環境を創るためには、異なる性質の人々とのコミュニケーションが欠かせない。しかしそれはとても高度な技術を要するために、ある限定的な人たちだけのものになりやすい。“他者とのコミュニケーション”はあらゆる人にとって生きるために必要不可欠なものであり、コミュニケーション力が問われない仕組みの発明を「アート」に委ねたいのだ。そして、その「アート」が機能すれば、価値観や習慣、世代、身体的性質の異なる人々が、互いの関係性を愉しみながら共存できる風景が実現する。

2 新しい関係性

「アート」を媒介にすることで、集うことが可能になるたくさんの関係がある。社会のなかで、目的のない場をじっくりと味わうことは「アート」以外では難しい。目的がある場での関係には必ず利害関係があり、ある役割を演じなければならない。「アート」の場を活用することで実現できる関係性は無限に開かれている。「ぐるヤミ」のつくり出す風景は、関係性の新しいあり方を示すことになるだろう。

3 文化技術

文化環境をつくることは簡単ではないので、「技術」がいる。「技術」はワケのわからないものとどうつき合っていくのかを考える勇気をくれる。文化環境に必要な「技術」は、“発明するための技術”と“存在させるための技術”。それは、内なる意志をどう見つけるかであり、それを伝統や常識とどう結びつけていくかを経験のうちに見いだすことである。

4 技術を向上させるための「レシピ」

より多くの人々が、創造性に触れることができるようにするための「レシピ」の開発も文化環境を創る上で重要である。「レシピ」を利用する人は、実現していくプロセスの中でなかなか思い通りにいかないはがゆさも含め、他者とのコミュニケーション自体を愉快に味わえる技を獲得する。

5.「ぐるヤミ」の3つの柱

①ぐるぐる

「ぐるぐる」とは、身体に渦巻くエネルギーのこと。生命力の源泉。

「ぐるぐる」の特徴

- エネルギーなので目には見えず、大きくなったり小さくなったりする。
- 一つでは消耗していく一方で、徐々にエネルギーを失ってしまう。他の「ぐるぐる」と反応し合い、摩擦を起こすことでエネルギーを保っている。
- 身体を拠点として存在しているが、皮膚を超えて存在することができる。
- 平面的な渦巻きではなく、立体的に蠢く。

「ぐるぐる」が生きるために必要なもの

- 反応領域 ：「ぐるぐる」は「ぐるぐる」に反応することで、エネルギーを持続する。しかし、全ての「ぐるぐる」に反応するわけではない。それぞれの「ぐるぐる」は、それぞれの反応領域をもっている。
- 精神の移動 ：「ぐるぐる」は身体とともに存在するが、「ぐるぐる」を健全に維持するためには、精神の活動が鍵となる。精神は、肉体を離れ、途方に暮れたり、右往左往したり、インナートリップ（旅）したりできる。そういった精神の移動が滞ると「ぐるぐる」も凝り固まって機能しなくなる。
- 距離感 ：「ぐるぐる」は単体で存在し続けるとエネルギーを消耗してしまう危険性があるが、「ぐるぐる」同士が接近しすぎても摩擦により激しく消耗してしまう可能性が高い。「ぐるぐる」は皮膚を持たないので距離感を調節しづらいが、「ぐるぐる」同士が少し反応しあう程度の距離感まで近づいたら、それ以上は近づく必要はない。磁場が発生するかしないかのところで、近づいたり離れたりするのが好ましい。
- ワカリエナイモノ ：「死」あるいは「他者」のように、自分の力ではどうにもならないもの、完全には理解しきれないもの、そういったワカリエナイモノとともに存在する時間（祈りや瞑想、丁寧な観察や作業など）は「ぐるぐる」の栄養になりやすい。
- すみか ：「ぐるぐる」には皮膚も無ければ服も無い。「ぐるぐる」が安全に存在するためにも、「ぐるぐる」を見失わないためにも、「ぐるぐる」にはホームが必要だ。「ぐるぐる」のすみかにあたるのが当人の「リアリティ」である。当人の身体・知覚によって立ち上がる経験を素材として「すみか」を形成する必要がある。
- 外界 ：「わたし」とは関係なく動き続けている「風」のようなもの。「わたし」とは別に存在し、気配や予感となって「わたし」の内に現れてくる。「ぐるぐる」が活発な時には邪魔になり、「ぐるぐる」が消えそうな時には希望になる。

「ぐるぐる」の消耗と忘却

「ぐるぐる」は自覚することが困難なために、知らない間に「ぐるぐる」が消耗していて日々の判断基準を見失ったり、「ぐるぐる」が無かったことになってしまい、心の底から湧く感動体験ができなくなり、日常が色あせてしまう。「ぐるヤミ」では、「集まって解散する」を繰り返すことで、人々の日常に磁場を創り出し、関わる人ひとりひとりに異なるリアリティを蘇らせることを目指した。

「ぐるぐる」にはたらきかけるための6つのプログラム

「ぐるヤミ」では、「谷中妄想ツァー!!」や「野点」、「谷中妄想カフェ」など、いくつかのプログラムが開催される。しかし、「ぐるヤミ」においては、各プログラムを開催することが最終目的ではない。

1	はっち	「ぐるぐる」を励ます
2	谷中妄想ツァー!!	「ぐるぐる」が反応する「大きなぐるぐる」をつくる
3	きむらとしろうじんじんの〈野点〉	「ぐるぐる」を大切にして生きている人と出会う
4	ぐるぐるミックス	「ぐるぐる」が共存する場をつくる
5	谷中妄想カフェ	「ぐるぐる」の存在を思い出す習慣をつくる
6	どーぞじんのいえ	「ぐるぐる」が日常に浸透した風景を体験してもらう

そのプロセスにおいて人々の「ぐるぐる」を励ましたり、「ぐるヤミ」をやっている人たちが「ぐるぐる」の気配をまといながらまちの中を右往左往していることこそが真に創り出したい風景に一番近い。

②妄想

「妄想」は「ぐるぐる」の再生を握る鍵である。

わたしたちの「行動」には大きく分けて2種類の方法がある。

A　「認識」→「解釈」→「想像」→「判断」→「行動」
　　＝無難な出来事

B　「予感」→「妄想」→「決断」→「行動」
　　＝生命力を養う出来事　※「文化」をつくる栄養源になりうる

通常、何か行動を起こそうとした時に意識化されるのはAの行動である。Bの行動は、他者と共有することが難しく、当人以外の人には予測しづらい出来事なので、社会の中では必要とはされず、軽視されやすい。
しかし、Bの行動については、もう少し丁寧に見る必要がある。なぜならこれは、行動を起こした当人とそれに関わった当事者間においては「迷惑」や「トラブル」として回避すべき、抑制すべき行動として捉えられるが、「わたしたちの問題」として捉えた時には、その「トラブル」という出来事が、結果的に「わたしたち」あるいは「みんな」にとっては栄養になることが大いにありうるからだ。

B-1　「予感」→「妄想」→「決断」→「行動」
　　＝迷惑になりやすい出来事＝関係性を深める出来事

B-2　「ぐるぐる」が反応→「予感」→「妄想」→「決断」→「行動」
　　＝精神の栄養になる出来事

↓

「妄想」が人々の暮らしを深みのあるものにし、「文化」を醸成させる鍵を握っている。

「妄想」の特徴

- 外側からは嘘、空言に聞こえるが、当人からすると完全な空言ではなく、実際にそんな気がしてしまうようなことなので、当人と他人との間で実感にねじれがある。
- 妄想の根拠は説明しきれないが実感があり、社会的な文脈に則って説明された事柄にも実感が伴わない領域があるという実状がある。
- 「妄想」はただの「嘘」ではない。丁寧に注目することで、新たなリアリティに触れる可能性を秘めている。

「妄想」を肯定することで……

- 「妄想」は「ぐるぐる」が引き起した現象である可能性が高いため、捉えづらい「ぐるぐる」を「妄想」という現れを通じて間接的に励ますことが出来る。
- 「私の見ているこれが現実だ」という傲慢な態度ではなく「妄想かもしれませんが」という「謙虚な態度」を獲得できる。
- 「無知さ」や「未熟さ」を言い訳にせずに、今あるもので発想するという積極性を促せる。

「妄想」を行動に移すことで……

- ついつい忘れがちな、仲間とわたしの差異を再確認できる。
- 自分が理解し得ない次元が現実にはたくさん存在している事実を受け止めるきっかけができる。

「妄想」を味わう文化が根付いていくと……

- 創造することへの「勇気」が湧く。
- 「忍耐」が「味わい深いもの」へと変わっていく。
- 他者への敬意が湧く。
- 謙虚になるきっかけが増え、日常に幸福感や感謝の気持ちが湧きやすくなる。
- 生命力を帯びた妄想の痕跡が日常に溢れ、生命力が弱まっている時でも生きやすくなる。

③ヤ→ミ→

「ぐるぐる」に反応して行動を起こすのが「ヤ→ミ→」である。
「ぐるぐる」している人に出会うと、ついつい反応して行動してしまう傾向を持つ人を言う。

「ヤ→ミ→」と「ぐるぐる」の関係

「ヤ→ミ→」たちが動くと「ぐるぐる」が日常にからまっていき、「ぐるぐる」のかけらが点在する「日常」を創りあげる。

- 「ヤ→ミ→」が「ぐるぐる」に反応することで……
  「ぐるぐる」はエネルギーを蓄え、活性化する。
  「ヤ→ミ→」は「ぐるぐる」を帯び、「ヤ→ミ→」の日常に「ぐるぐる」が浸透していく。
- 「ヤ→ミ→」がいないと……
  「ぐるぐる」は、それぞれで燃焼して終わってしまう。
- 「ヤ→ミ→」が意図的に「ぐるぐる」と絡まることを愉しむと……
  「ぐるぐる」と「ヤ→ミ→」が絡まり合った「ぐるヤミ」の空気感ができあがる。

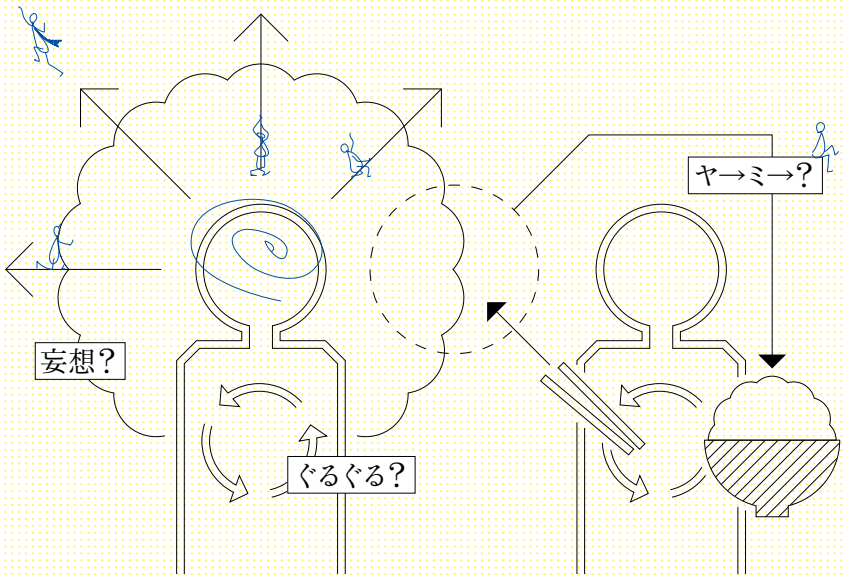
「ヤ→ミ→」の主な態度

- 「ぐるぐる」の引力に引っ張り込まれないようにしっかり常識の側に立つ
- 「ぐるぐる」同士が喧嘩しないように気を配る
- 「ぐるぐる」を励ます
- 「ぐるぐる」との愉しい関わり方を見いだし、体現する
- 「ぐるぐる」に対して合いの手を入れることで第三者がその場に関われる余白が生まれる

※人は誰でも「ぐるぐる」をもっていて、また、「ヤ→ミ→」にもなりうる存在である。

「ヤ→ミ→」と「妄想」の関係

「ヤ→ミ→」が「妄想」の具現化を促すことによって、「ぐるぐる」を帯びた出来事や噂話が生まれる。それらは「ぐるぐる」を刺激する出来事となり、「ぐるぐる」の連鎖を引き起こす。

- 「妄想」を出来事にする
  「ぐるぐる」が反応してつくりだした妄想を「ぐるぐる」した当人に実行してもらい、「ぐるぐる」が帯びた行為を存在させる。
- 「妄想」を事実にする
  実行した「妄想」を目撃する人を招き、「妄想」を事実化する。
- 「妄想」を伝説にする
  「妄想」に関して話す場をつくり、「妄想」に関するエピソードや、今後の展開についてあーだこーだ話し合ったり噂したりする。

「ヤ→ミ→」たちによってまちのなかに「ぐるぐる」を帯びた出来事が散りばめられ、まち全体に「ぐるぐる」が帯びていく。「ぐるぐる」と「ヤ→ミ→」が絡まり合ってできあがる「ぐるヤミ」の空気感がゆったりとした大きな波紋となり、じわじわとまちの日常に浸透していく。